

二〇〇一年

一月

新世紀の幕

一斉に万発の花火轟きてはらりと落ちぬ新世紀の幕漆黒の空
にはじくる火の花弁刹那の命を変化して果つ

年明けを祝ふ神舞つるぎ舞夜空を焦がすかがり火に映ゆ

きざはしに肩触れ合へる老若の男女の面もかがり火に赤し

ママコトの如くおせちを整へつ二人のみなる二度目の正月

茫茫と我が二万五千日は過ぎにけり意義あらしめな残れる日々を

二月

いさかひ

銀盤に発止と舞へるカップルを一人見てをりいさかひの夜

腹ふくること堪へざる我が性の言はずもがなの一言を悔

ゆ

君と我四十年も共にすねど掻き傷の糊塗も未だ手慣れず

意地張りて一人虚しく観るテレビにふと甦る幼き日の感触

摩擦こそあれど互ひに生地のまま過こし得る老後をいとほしむべ

し

三月

いぶつこの苗

帰宅せる車の前をカラス二羽舞い降りる見ればわが猫倒れる

て

眼球の飛び出し血へどを吐ける猫呼べば肺腑をしほりいらへ

す

馳せ行ける若き獣医は手早くも眼を縫い込め砕けし顎も
息絶え絶え酸素の箱に横たはる猫の名呼べばかつべを回さむ
とす

二十日市の朝に死したる若き猫の塚に二尺のこぶしの苗植う

四月

若葉の頃

山笑ふ山笑ふと夫に語りつつ芽吹きの色の様々を行く
青空もパステル色の春日和菓立ち行きたる娘は遠くして
雄木かとも思ひしまゆみのやはき葉の陰に花着く五年を経
て

娘と歩む孫のキャンバス華やきて一際映ゆる楠のさみどり
キャンパスのみどり眼鏡に影さして日焼け消えたる孫初々
し

五月

碧玉の列

豌豆の若緑なる霜降りの莢より水滲む爪先立つれば
豌豆の莢ザックリと割り剥けば碧玉の列詰まり並べる
ひとつきの初夏の味なり豆汁飯子らと過らせし思ひ出囁みしむ
終戦後初めて採りたる豌豆を炊きたる母の味惚ぶ宵
庭石の影なる白きとくだみの花つつましく祖母思はする

六月

都井の岬

梅雨の間の湧き立つ霧を吹き払う風も冷たき都井の灯台
灯台に並び立ちて太平洋見下るせば視界三百度茫茫と霞む
手つかずの自然少なし野性馬の草食む原を囲む植栽
初めての地とて巡れる夫と我を小半時車中で待ちある老たち
都井の海見納めならむと肝を病む老兵静かに遙かを見詰むる

七月

マハテイルの涙

忘るるな虐げられし時代をと老いしマハテイル涙くみ告ぐ
民族の格差無くさむと努めしがイージーな民を生みしと悩め
る

国思ふ情熱に溢るる若き日のマハテイルの瞳の輝きは消え
て

後継者の出でぬ悩みは大いなる指導者の持つ宿命なるらむ
手本たりし日本の歩みは今やはや他山の石と言はるる悲しそ

八月

追憶の挽歌

友の声くぐもり告ぐる転職の我を支へし上司逝きこと
病めるさへ知らず過ぎせし我なりき湿れる友の声に絶句す
五十路前に何故急ぎ逝けるやアルバムを開けば聞こゆ明かし
哄笑

八年前離れし職場懐かしめど笑みて手を伸べし人すでに止き

再会のある疑はずして八年を無音に過ごせる口惜しさを嘯む
掌触るるさえなく過ぎしかとその眼差しは意識してあり
五十路前になど逝きたるか高らかなその笑い声ふと蘇る
たまゆらの優しき眼差し我に投ぐ十の瞳の六つすでに無き

九月

報復の果て

正しき者先づ屈せよと父母の師の教へにあるを思ひ出づる夜
圧倒的物量を背に報復を誓うブツシユに冷たき意地見ゆ
貧困と飢寒の世界と金と物溢れたる世界画像は偽らず
報復は報復を呼び果てしなき戦とならむこの情報の世に
八百よろづの神いますます日本なれば世界なごませよ大き心
に

十月

ソウル警見

日韓の交流ミッションのせわしなき合間にありしソウル見物
夫生れしソウルの街の喧騒を異国と思へずしばし佇む
少年の夫の写真の大通り南大門はビルに埋もれて
その上の玄関たりし南大門今は車の蛇口の如し
大道に物物物の溢れあて肩触れ過ぐるソウル下町

十一月

十の瞳

ふかぶかと思ひ懐かしむ手を触るることさえなかりし異性の
五人を

青き実の我に一言告げしならば君の生かくあらざりしか我も
マフラーのよじれ直さむと差し伸ばすその手も出せざりき初
恋の人

「結婚します」告げし我見るその瞳に燃ゆるものありき今は
亡き人

ひたと夫に寄り添ひ立てる我なれば「からたち日記」を挽歌
と歌ふ

何も言ふことなかれ君さざ波を渦と変ふれば須臾に消ゆるも
十二月

年の瀬の訃報
年の瀬の酒の客らの歓談のさなかの電話は叔父の訃を告ぐ

血縁のただ一人なる叔母の夫我に優しかりし叔父も逝けるか
東大の建築科卒の最長老九十六歳なれば天寿と言ふべし

遠くより別れを告ぐと弔電を打ちてし我は祭りの舞舞ふ
叔父上よ父母叔母とみそなはせ異郷を郷と我舞ふなれば

二〇〇〇二年
一月

大寒の庭
雨上がり枯れつめ草に光る陽は春のきらめき大寒なれども

大寒の寒さ戻れる曇り日に枝垂れ梅咲く去年植えしばかりに
暖冬は人為の異変よ環境を無視の開発その果てを知らず

造園後八年を経てやつやくに千両の実の着けるをことほぐ
大寒の街をコートを手には歩む地球の異変かこの暖冬は

岩ツツジれんげつも蕾まだ固しふと蠟梅の香の流れ来る

銜ふなくのびやかな預選歌眺めつつ歌のこころのありと思ふ

日

二月

名護屋城

古来よりの幾多の攻防沈めたる玄海波濃く春風やはし

治国後の血祭りとはかり故もなく攻め入られたる朝鮮哀れ

一時の戦のための壮大な城址は示す太閤の権勢

膨大な戦費ならむに割り当てを競い築ける大名の見栄

玄界灘岬の突端に敷かれたる島津の陣は小さかりけり

前線の死闘を余所に名護屋城は大名どものサロンたりしと

三月

老猫ナスビの失踪

「まあバッチイ」とかけし言葉が最後とは老ゆれど王者の風格ありし

猫

ノルウェイ種のまたハオの猫をれと薩摩の言はきく早めが

スライドのミルクで育て捨てる猫スレと名付けしは「男坊なり

八年前イジに入れて伴ひ来むは城跡に震えて半日動はす

早春の雌を争ひて駆ちなくむのその猫もは悲びて

子と孫と野良猫や連ねて五匹の猫残り居むも心癒せず

市比野の泡立ち吹き出し温泉に身を打たせぬのうらやきの幸
我植えし枇杷鈴なりに小粒なれど熟れしを剥き食む甘やちつき
枕崎で買ひ来たりたるトクツオ庭の大葉を摘み添ふその香も
ミキサーにハナナ蜂蜜牛乳を掛け夫と飲む午後のおつき
鮮やかな巨大画面のハイビジョン茶の間で夫とWで戦観る

七月

北信濃の旅

朝もやの山並みは包む家々のまじり埋む善光寺平
年数百万五輪選手も俳優も霊験信し善光寺に詣ると
北斎の才と画業に打たれ行く小布施は智慧で賑わい生む町
豪商の様を伝える田中家は家訓を今に須坂に健在

乾き澄む信濃の空気は夏の陽の光線カッと直にこそげり

八月

野良猫の死

去年の夏ノラの産みたる黒猫ははや二匹の母となりたり
黒猫は人に馴染まず同じ親の口をほめながらも撫む抱かれど
生得のノラ黒猫は物置の奥ノラを産み隠し育てし
一月を隠し育てしノラの母は口をほめず産み隠れし
気の強く乳を独占せしノラ猫も一匹形見を残しぬ

九月

北肥後紀行

田原坂雨中の死闘を悼みし巨木耐震の塔仰ぐ秋

蛇行せる菊池川辺の露大湯よ遙かに阿蘇の山なみの見ゆ
霧の中を景行天皇を迎へしと山鹿の伝へる灯火優し
青々と稲田広がる北肥後は南北朝の攻防の里
変事ありし古城はいし豊かなる農の恵みと忘れ去られて

十月

明日香の旅

刈り終へし田の辺に柿の色映えて明日香の里に優し秋の陽
飛鳥寺大きき仏の健やかに見守り給ふまほらばの里
畑中の入鹿の直塚ぼつねんと今に語り興亡の夢
茜さす山影柔しふかぶかと秋色纏ふ万葉の里
天上の風音がと聞く大ニ輪の巫女の打ち振る鈴松ひの音

十一月

姪の結婚式

姪の式久々に集ふ弟妹のいれも病める励ますは我
誓ひけ姪の式とて正装し気丈にも笑む癌を病む妹
人前式といふは新たな流行か宴席にて誓ひの言葉読む二人
新郎新婦又多くして宴席は若き活気と喜溢れもの
雑踏の中に馴染みて鹿角島の八年は夢と思へる不思議の

十二月

師走の口々

屋根を打し雨音のこが微かなり独り稿書く師走のあけぼの
霜枯れし紫陽花の葉の朽ちし色に老残の思ひひびき離れず
ゆるゆると師走の風は浮かびゆるる羊水の鉢の枯れ葉を回す
年の瀬の包み届けりそれぞれに口が道行く五人の子らより
購ひしバリカンを手に垣を刈る夫の姿も様になりぬて
なほあふと訝しつもひたひたと近づきしあり戦争の足音

父の思ひ出

父逝きて七年の忌と弟の便りに遠き日々浮かび来る
床屋より帰れる我を抱き上げて見せる鏡に父の笑顔も
赤々と陽の入る原に建つ寺に父と語りふ大き住職
観兵式幼き弟を肩車に代々木の原に行く若き父
ガラス戸の書棚巡らす窓辺なる大き机に大き父の背
じつとじつと父の書齋の戸隅に寝とべり我も書を読む遠き日
「お八つだよ」とそそくそと書齋を出て来たる父も三時を待ちぬたる
如し

「ウマかったウシました」 なほおとけぬし父の姿を弟妹は知ら
ず

指揮刀を手に演習に出る口の父見送りし母と祖父母と
信州に移りたる秋のある夕べ軍服の父は密かに出征す
父逝きて三月も経たぬに真珠湾の攻撃のあり世は騒然と
祖母の葬儀と人集ひたる昼下がりに父負傷すとの報の入れり
祖父も逝き肩書する母と四人の子に強制疎開の報の無情と

市役所の隣なればと蔵をのみ残して全て打ち壊されたり

敗戦を知りしは祖父の故郷の桑畑奥の大叔母の隠居屋

復讐の浅黒き父の眼光に若き日の笑みの消えし去りしを知る

生きるため俄商人となれる父の歩み阻める下肢貫通銃創

背にリユック痛む足引き異郷の地をゴム履物を卸し回る父

仏典の研究に遂に戻り得ずひたすら平和を祈り写経す

幾たびもの浮沈の後に念願の平和を祈る寺に父眠る

